

# Mansfield の世界

## “The Garden-Party” 論

水 田 圭 子

Katherine Mansfield (1888~1923) の世界は、現実と夢幻的世界の照応からなっている。現実とは、彼女が置かれていた状態、具体的には、よい作品を発表していたころ彼女は病気の進展の中で死と闘い、また、その前には弟の死により New Zealand に対する愛着を新たにされたことなどである。この世界に対し、彼女は自分にとって夢の理想の世界を想定して、たえずこれと交信しながら短篇の素材とした。具体的には、先の New Zealand で過した幼いころの思い出を純化した世界である。そのようなことが顕著に表わされているのが『園遊会』(1921年に執筆)である。以下この短篇を細かに見て行きたい。

『園遊会』は初夏のある園遊会の行なわれる日の明け方から夜までの時間の中で少女ローラ (Laura) の人間的成長を扱ったものである。冒頭の一節はシェリダン家の庭の上の空の描写から始まる。このシェリダン家は、Mansfield が生まれ育ったビーチャム (Beauchamp) 家の姿を反映している。1921年頃の Mansfield にとっては New Zealand のビーチャム家の思い出はかなり昇華されたものであり、思い出もまた新たな創造、一つの理想化なのである。このシェリダン家に対する現実の世界は、Scott 家を中心とした、シェリダン家の立っている岡の麓の小道に並ぶ貧しい一画である。まずこのシェリダン家の庭の描写は、Mansfield の夢幻の世界にふさわしく、これから始まる園遊会の前奏曲として明るく軽やかな雰囲気を持ち、最初の出だしとして成功している。青空に薄い金色のモヤがか

かり、庭師が明け方から芝生を刈り、草もばら型花壇も輝いてみえる。バラについていうなら、バラは園遊会を代表する花であり、誰でもが確かに知っている花で、数百の花が一晩で咲き、バラの木は大天使(“archangels”)が訪れたかのように丸く身をかがめていた。バラは夢や希望や理想の象徴であり、楽園の世界であることを示す。また Mansfield の幼いころの思い出の人物が登場してくるには全く申し分ない(“ideal”)情景であった。大天使は、その Mansfield にとっては神聖なる思い出の詩化された領域を守る天使であり、その日の点検にきたものたちのようである。園遊会は今年子供たちに任せるとシェリダン夫人はいう。そこで子供たち、中でもローラが園遊会に使う大テントのおき場を指定する役を任かされる。これが決ってしばらくした後、ローラが台所へサンドウィッチにつける旗を持っていくと、そこで思いがけない話をきく。

クリーム・パフを届けにきた Godber の店員から、麓の貧しい区域に住む Scott という男が街角で事故に会い死んで遺体が家まで運ばれるところだったということを彼女はきく。この場合、Godber の店員は、下の(現実)世界からローラの住む世界へニュースを持ってやってきた使者の役割をしている。この Scott により代表される貧しい区域、そこはまた死の谷間でもある。この小道に固まって貧しい小さな家に住む職人的仕事を職業とする人達は、現実の世界を如実に現わしている。シェリダン家の庭がバラで代表されるが、こちらの庭にあるものはキャベツの茎であり、病んでいる鶏、トマトの空カンであり、煙突の煙すら細々としている。このような所に住む Scott は、シェリダン家の園遊会が始まる少し前に亡くなったのであり、妻と五人の子供たちが残された。ローラはこれを知って、楽団の演奏が悲しみに沈む女にどんなに響くかと心配して園遊会はやめにすべきだというが、姉や母は常識を使いなさいとやって応じない。結局園遊会は行なわれるが、パーティの終わった後で、シェリダン夫人は、自分の夫がこの Scott の話をしたのがきっかけでパーティの残り物を

贈り物としてローラが持って行くことを提案する。しかしローラは残り物などを持って行って果たして Scott 夫人が喜ぶかしら、と思う。彼女はシェリダン夫人よりも人の心に対して想像力が働く。シェリダン夫人は、ローラに“Run down just as you are.....”という。これはローラがこの夢幻的世界の代表者として、現実界へそのままの姿でおりていく、つまり園遊会の華かな服と帽子のまま下っていくことを意味する。

たそがれの空の下を夢の世界から岡の麓の死んだ人が横たわっている家まで静かな一本の夕暮に白く浮いてみえる道を下って行く。この白い道というのは Mansfield の場合特別の意味を持っている。これは、先の夢幻界と現実界を結ぶ道なのである。“Bliss”（『幸福』）という短篇の中では、白いものとして、白い花が一斉に最高な状態で咲き出した梨の木がある。昼間白かった梨の木を夜今度は月の光の中でバーサ (Bertha) とミス・フルトン (Miss Fulton) は、彼女たちも月の光をあびて見ている。すると梨の木はロウソクの炎のように伸びてやがて月に届き二人共、別の世界の住人で、幸福の白い炎が胸の中で燃えながら、二人でこの現実の世界へ降りてきて何をしようかしらとの思いにふけている部分がある。至福 (bliss) の白く輝く炎として白い花の咲く梨の木は考えられ、その象徴となっている。これから見てもわかるように園遊会の中の白い道は、この世ならぬ世界とこの世をつなぐものであり、白は bliss を表わす色である。そしてローラはこの道を降りていよいよ貧しい区域へはいつてみると、女たちは男物の cap を被っている。ローラ自身は園遊会の時のレースの服と帽子のまま、特に帽子は、長い黒いピロードのリボンのついた金色のデージーの飾りのある黒い hat であった。それに対して彼女の降りてきた現実界では、暖かく実用的な tweed cap であり、二つの世界の対照がはっきりしている。Laura はもともと階級差別という因襲に反対であり、彼女が今やってきた上流階級を代表する hat を被ってきたことを後悔する。

暗がりの貧しい一画にはいつて行くと目指す家に来た。外に黒い人だけ

りがしていた。それはシェリダン家の園遊会に集った小鳥のように華やいだ人々の群と対照的である。そして門の傍には松葉杖をもった大変年取った女がいて、新聞紙に足をのせて椅子に坐っていた。松葉杖や新聞紙はこの現実界をよく表わすものである。そしてシェリダン家では、園遊会は子供たちに任せ、姉妹たちは、ローラに任せたりして協力心や暖かい思いやりが欠けているのに、この Scott という死んだ男の家では、Scott 夫人の姉なる人が接待役をし、ローラに無愛想な妹を一生懸命かばう。Mansfield の現実界への暖かい思いやりというものが感じられる。また Scott 夫人が目を泣きはらして座っていたすすけたランプのともる粗末な台所は、シェリダン家のサンドウィッチや、クリーム・パフが並んでいた豊かな台所とは対照的である。この姉は終始、文法を無視した (ungrammatical) 話し方をするのがこもっており、園遊会の人々の気取った会話 (“My dear……”) などはない。彼女は自分の服装や帽子を気にしながらそして早くその場を逃げ出したいのだが、彼女は当然のこのように、この死んだ男が横たわっている 部屋へ今度は案内され、彼に対面する。姉なる人は、ローラに “e looks a Picture.” という。この言葉は、シェリダン夫人がローラに先の新しい黒い hat をかぶせた時、“…… I have never seen you look such a picture……” というのとほぼ同じであり、優しい心のローラに使われた言葉とこの貧しい区域の男に使われた言葉は一致している。違う世界に属する言葉であるが、ローラによりこの言葉は統一され、Mansfield がこの二つの世界を呼応するものと考えていることを示す。

その若い男はぐっすりと眠って安らいでおり、この世からずっと遠い所にいるのであり、夢に委ねられていた。園遊会もカゴへ入れて持ってきた贈り物も、レースの洋服も彼にとってどうでもいいことであり、彼は素晴らしく美しかった。彼女たちが騒いでいた間にこの奇蹟はこの小道で起っていた。ローラはこの男が事故にあった傷跡の痛ましさもなく、安らかな満足しきった美しい顔で横たわっているのを見て人生について一つの啓示を得

る。死は安らぎであり厳肅なものであるという啓示である。死すべき運命を持つ人間もその死を通ることにより神々の住むという至福の世界に必ずはいることができるということである。ローラの世界には、至福の神々の住む世界を思い出させる雰囲気があり、この男の死はすでに上部世界のものであり、ローラがそれに気づくことにより、これら二つの現実界と夢幻界は統合される。さらにローラは死は起こしてはいけない程安らいだ夢の世界なのだを知る。生まれながらの貧富の差はあっても、そのことよりも貧しくても暖かい人々の間には、富や階級に無関係に一つの幸福の境地に到達できることを知る。シュリダン家が代表していた夢幻的世界はこの至福の世界であろう。幼い時の思い出は純化され、すべてよしというこの世界の雰囲気は Mansfield にとり至福の白い世界であったろう。

シュリダン家のカラカの木 (Karakas-trees) は、黄色い房状の実をつけており、孤島で誇り高く、孤独で、一種無言の壮麗さで太陽にその葉や果実をかざす木だと書かれている。この不死なる神木のように威厳のあるカラカの木は、現実の死を象徴するキャベツの茎のくち果てる様と対照的である。キャベツの世界に住む男が安らかな死を迎えたのは、カラカの木の世界の住人であるローラには「奇蹟」(“marvel”) としか考えられなかった。男は「すばらしく、美しい」姿であった。

ローラという一少女の一日の体験はまた人の一生の凝縮でもあった。この作品は単に上流階級の園遊会を日常的な視点から描き、階級差別のむなしさを描いただけでなく、また人生の現実を一少女が体験するということを書いただけではない。死をまぬがれぬ人間にも、神の住む世界がもつような至福を見出すことができ、人生へでき得る限りの誠実さを貫くことにより真実の姿を発見できることをも語っている。Mansfield はローラの世界——New Zealand での幼時の幸福を夢幻化し詩化した世界——を、現実の Mansfield の死と直面する世界と対照させている。Mansfield はローラを通じて、両者を和合させ、いわば夢の世界と現実の世界とを統合さ

せた。詩化された夢幻の世界と現実界との巧みな照応と統合は、一般に Mansfield の作品にあらわれる特徴のひとつとも考えられるが、『園遊会』はその典型的な表現となっていることは以上の分析によってあきらかであろう。